

惑星と場所: 人新世的状況における居住可能性(habitability)をめぐる

## The Planet and the Place: On the notion of habitability in the Anthropocene condition

篠原雅武

京都大学大学院総合生存学館, 特定准教授, 博士 (人間・環境学), yawu1116@gmail.com

人新世(じんしんせい)で問われるのは、人間が引き起こした変化のなかで人間が生きていくには人間の生活の条件をいかなるものとして作り出すのがよいのか、ということである。そこで拠り所となる理念としての居住可能性への問いが要請される。また、人間が引き起こした変化のなかにある居住環境そのものが、non-human な場所性において存立し、そこで人間が生きてしまっているのを認識するということが求められる。チャクラバルティは、「人間存在の条件でありながら、その存在には徹底的に無関係である何ものかとの遭遇」と表現するが、この認識は、人間と環境の相互性に関する考察に修正を迫るものといえる。

人間と環境の相互性, 惑星の他性, 居住可能性, 場所, 制作, 歴史的物としての世界

はじめに

2015年の論考「人新世の軌跡」で、ウィル・ステッフェンたちは、「地球システムの構造と作動における変化が、主に人間活動によって引き起こされているという多くの証拠が存在する」と述べた。この見解との関連で問われるべきは、人間が引き起こした変化のなかでなお人間が生きていくには人間の生活の条件をいかなるものとして作り出すのがよいのか、ということである。そこで拠り所となる理念としての居住可能性への問いが要請される。さらに、この問いのためには、その前提として、人間が引き起こした変化のなかにある居住環境そのものが、「文化的・社会的構築物」として自律し得ず、その外部の、non-human な場所性において存立するというをまずは認め、そこで人間が生きてしまっているのを認識するということが求められる。このことに関して、ディペッシュ・チャクラバルティは、「人間存在の条件でありながら、その存在には徹底的に無関係である何ものかとの遭遇」と表現するが、この人間存在の条件の人間に対する無関係性の認識は、人間と環境の相互性に関する考察に修正を迫るものといえる。

1

たとえば、「環境が人間を作り、人間が環境を作る」というのが西田幾多郎の主張の一つで、この環境についての思想が、和辻哲郎の「風土」のような思想へと継承されていくというのが、近代以後の日本における(反近代的な)環境哲学の基本設定である。多木浩二が『生きられた家』を書くにあたって、その論述の前提に関して次のように述べたときにも、その基本は変わってなかったと考えることができるだろう。多木はこう述べている。

どんな古く醜い家でも、人が住むかぎりには不思議な鼓動を失わないものである。変化しながら安定している、しかし、決して静止することのないあの自動修復回路のようなシステムである。

ここにあるのは、安定性、自己修復回路のような抽象的実体が存在することへの信頼である。この書の初版は1976年で、その後改訂版が1984年に刊行された。これはちょうど、高度経済成長が落ち着いた時期で、都市の急激な拡張にともなう変化と成長がおさまって、むしろ安定性と不変性が求められるようになった時期であったということ、本書の論述の随所に感じることができる。安定性は、都市開発による「空間の均質化」との対抗関係において見出され、守られるべきものとして定式化され、それを正当化するためのものとして、ハイデッガーの議論が参照され、人が家との安定的な関係のなかで使う(住まう)ことで生成する「生の多様性」に注目するという視点が定められるのだが、テジュ・コールが日本での2011年の震災の後に撮られたいくつも写真を見つけた「徹底的な定まらなさ(extreme uncertainty)」の観点——「世界での安定的な場所を突如として奪われてしまう」からいうと、この著書自体が過去に属するものとなったと考えるべきではないか。多木の著作が無意味になったというのではないが、これを読むだけではわからない状況を、私たちは生きるようになっていくことをまずは認めるべきである。第一に、多木のいう「生きられた家」は、持ち家である。そこに住む家族の私的所有物である。借家の場合、急に追い出されることもあるし、引越して、住む人が変わることもある。なので、多木のいう「家と人との相互作用」は、家と人との私的な結びつきの継続を前提とする。

また、たとえ持ち家であっても、災害や戦争によって破壊されることもある。安定性、自己修復回路の存在は、そのような突発的で偶発的な世界の変動状況から逃れ、それに対して守られていることを前提とする。さらに、住まわれる環境は、そこに住む人間によって形成されるだけでなく、その外側の諸力によって形成されることもある。つまり、人と人との結びつきの世界の一部である「生きられた家」について考えるためには、それがそこにおいて形成されることとしての外的世界との関連で考えることが求められる。

## 2

私たちは、そこに住む人との私的な結びつきの関係をつうじて「生きられた」ということが居住可能性の根拠とはなりえない状況において、生きるようになりつつある。そしてこのように考える際に拠り所となりうる議論の一つが、ディベッシュ・チャクラバルティが2019年に「惑星」という論考で提示した「居住可能性 habitability」の議論であると私は考える。それは、チャクラバルティが、2009年の論文「歴史の気候」以来展開してきた、「気候変動についての科学研究や地球システム科学との関わりにおいて人間の存在条件を人文科学的に再考する」というプロジェクトの到達点の一つである。そこで彼は、人間を惑星において住み着く存在と捉える。「惑星」という概念は、地球システム科学で定式化されたものだが、チャクラバルティが独自のものは、この概念を参照しつつ、「人間の条件」に関する哲学的・歴史的考察という人文社会科学の問題に関する新しい視座を提唱しようとするところにある。すなわち、彼はこう述べる。「惑星は、この惑星がそれを天文学と地質学の研究の対象として示すだけでなく、生命の歴史を内包するきわめて特殊な事例としても示すところに属しているが、そこで、これらの次元のすべてが、空間と時間の人間的な現実をはるかに超過している」。チャクラバルティの議論は、人間の生活様式を、人間によって直接経験可能な領域を超えたところにおいて、その一部として住み着くものとして考えてみるということ、可能にするといえるだろう。そしてこの観点から、彼のいう居住可能性の概念が導き出される。2009年の論文「歴史の気候」で、チャクラバルティは、パウル・クルツェンが2002年に発表した「人類の地質学」での、二酸化炭素の排出や土地造成や森林伐採やダム建設が地球のあり方を変え、今後の気候がこれまでの安定的な状態とは異質な、不安定的なものになっていくという趣旨の議論を、人間の存在条件の根本的な不安定化を科学の側から指摘したものと捉え、「人間の歴史と自然の歴史の境界区分の崩壊」「近代およびグローバリゼーションに関わる人文科学的な歴史観の変容」「資本主義に関するグローバルな歴史を人間という種の歴史と対話させること」「歴史的な理解の限界」というテーゼを提起し

た。この議論が10年後の論文「惑星」に展開したといえるが、そこで一貫するのが、人間の生活条件を、人間を超えたものとの関連で考えるという姿勢である。2009年の論文でも、こう述べられている。すなわち、現在の危機は、人間的な形態における生活の存在を規定する、資本主義や社会主義やナショナリズムといったロジックと直接的には結びつくことのない別の条件を白日の元に晒す、と。この条件をめぐる考察が、「惑星」の居住性の議論へと展開した。

その展開において重要なのは、ハンナ・アーレントが1958年に試みた「人間の条件」についての考察（「近代の解放と世俗化は、生きとし生けるものの母である地球を必然的に蔑ろにする」）についての現代的な読解である。一方で、カール・ヤスパースやマルティン・ハイデッガーの技術についての考察（技術が人間を根無草にしている状況においては、地球はかつて人間が住んでいたところとは別物に変容していくという議論）との関連でいうと、それは人間が地球から疎外され地球を蔑ろにしている物語の一部ということになるだろうが、チャクラバルティが独自のものは、この見解の含意を、NASAの1968年の写真（「地球の出」）が当時の人々に与えた衝撃と並列させつつ導き出そうとすることにある。写真は、自分が住み着くところである地球が、遠く離れた地点からみると一つの客観的で総体的な事物でしかないという認識を可能にする。さらにいうとそれは、自分の足元を、安定的な大地としてではなく、宇宙の内部で動く、定まることのないものとして感じていくということでもある。この感覚が、チャクラバルティの主張の基礎にある。すなわちここから、惑星の他性（the otherness of the planet）、つまりはその大規模な空間と時間のプロセスの認識であり、さらに私たち人間がそのうちの小さな部分でしかないという認識が導き出されていくのだが、逆説的にも、この認識は、人間世界の外側において、人間が存在するのに先立って進展してきた惑星の「深層的な時間(deep time)」の深淵へと飲み込まれていくという感覚を伴うものであるとチャクラバルティは度々述べる。

## 3

チャクラバルティは、居住性に関して、次のように述べている。それは第一に、持続可能性の概念と異なっている。持続可能性は、「環境と開発に関する世界委員会（WCED=World Commission on Environment and Development）が発表した報告書」で提唱されたのであるが、そこで提示された、「将来世代がその必要性を満たしていく能力を損なうことのないかぎり」で現代世代の必要性を満たす発展」という見通しに関して、チャクラバルティは「人間中心主義的なもの」と考える。その根拠として彼が紹介するのがたとえば Paul Warde の論考“The Invention of Sustainability”（Modern Intellectual History 8, no.

1 (2011): 153-70.) である。それによると、持続可能性の概念は 18 世紀後期から 19 世紀初頭のヨーロッパで発展を遂げたのであるが、その背景には、必須の栄養素の循環という考え方の発展と結びつく、土壌の科学と農業の実践に関する新しい理解の進展があり（その代表格がユストゥス・フォン・リービッヒ）、そこから、循環過程の破綻は永続的な劣化へと至るといった思想が出てくることになる。

チャクラバルティは、これとは違うものとして、居住可能性の概念を提唱する。「居住可能性は、人間を考慮しない。そこで中心関心事となるのは生命であり、複雑で多細胞の生命一般であり、それをただ人間に限らず持続的にするものである」。すなわち、「惑星を、複雑な生命の絶え間ない存在にとって親和的なものにするのは何か」が問われる。

「環境が人間を作り、人間が環境を作る」という観点からいうと、居住可能性の問題で問われるのは、環境からの働きかけが人間のみならず生命一般を危ぶむ状況になっているところにおいて、人間がなおそこで生きるとはどのようなことか、そこで環境を作るということが何を意味するのか、ということである。

「人間の生きている世界」そのものが不安定化するなかで人間がそこで生きていることが何かを問うとき、たとえば西田が述べていることを参照するとしたら、人間が世界で生きていることを「制作」つまりは「物をつくること」との関連で彼が考えていたことの意味をあらためて考えてみるのが求められると私は考える。私たちが生まれ、そこで生き、そこでまた死んでいく世界そのものを、西田は人間が作り出す世界と捉え、そのことゆえに世界は歴史的世界だというのが、この世界の歴史性を規定する時間が、人間的尺度を超えたものにより左右されるようになっていく状況において、西田の思想をあらためて問うことができるだろうと私は考えている。さしあたり、建築の問題との関連で興味深いのは、彼が制作的な存在としての人間の一例として「大工が家を作る」ということを論じている、ということである。「歴史的身体」という講演（昭和 12 年に長野市女子専門学校講堂にて行われた）で示された西田の考えでは、大工が家を作るというとき、第一に重要なのは、それが大工の動作の客観的な実現形であって、そのかぎり、大工の主観を離れた、客観的な実在性を持つということである。さらに重要なのが、こうして作り出され、実在することの客観性ゆえに、大工がつくった家は、そこに関わる人間に影響を及ぼす、ということである。西田はこの実在的な客観性を「歴史的世界」の特性とみなすのだが、それに関して次のように述べる。

家は大工が造ってもそれは大工のものではない。大工のものにもなるが大工を使って造らせた人の家である。しかし出来上ると造らせた人のみのもので

もない。その人から買った人のものともなる実在である。その家が続いている限り天下の公共物として実在するのである。つまりそれは歴史的世界そのもの、歴史的事物である。（・・・中略・・・）。私が物を作る、物は私に作られた物だが私を離れて独立し、逆に私に働く。ものは私を作るがその物は公の物となり、つまり歴史的事物となり、それに依って私自身が変化を受ける、即ち私自身が作られてゆくということになるのである。

ここで西田は、歴史的事物を、人間が作ったものでありながら人間から離れたものと捉え、のみならず、人間に働きかけるものと考え、人間から離れたものでありながら人間に働きかけ、人間を作ってゆくということは、人間が住むことを支えるということでもある。この論点は、チャクラバルティのいう、「人間に対する無関係性」との関連で、さらに展開可能だろう。家をはじめとする人為的構築物が歴史的事物として存在するということは、人間を条件づける、つまりは人間が住んでいくことを可能にする条件が事物的であり、のみならず歴史的（人間の歴史的営みを含んでいる）でもあるということである。チャクラバルティの議論は、西田のいう「歴史的」の意味を、西洋近代において成立した「人間の歴史と自然の歴史の境界区分」が崩壊するという現在において問い直すことが可能であることを示唆している。また、その観点から、多木のいう「生きられた家」という議論を根本的に乗り越えることもできるだろう。

#### 主要参考文献

- Cole T (2021), *Black Papers*. London: The University of Chicago Press.
- Chakrabarty D (2021) *The Climate of History in a Planetary Age*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Steffen W et al. (2015) *The Trajectory of the Anthropocene: the Great Acceleration*. *The Anthropocene Review* 2(1): 81-98.
- 多木浩二『生きられた家』青土社、2000 年。
- 西田幾多郎『西田幾多郎講演集』岩波文庫、2020 年。